「鉄と鋼」と私

一読者として始まり、一読者に戻る

Started as a Reader, Going Back to a Reader

左海哲夫　大阪大学　接合科学研究所 招聘教授
Tetsuo Sakai

筆者が鉄鋼協会に入会したのは1975年1月のことだったので、すでに会員として40年近くを過ごしたことになる。入会した時の「鉄と鋼」は、会報と論文誌を兼ねた地味な表紙のB5版で上質紙に印刷されており、一冊のページ数も多く、内容はもちろん物理的にもずっしりと重い雑誌であった。その後A4版になり表紙もやや華やかなデザインが採用された。3年後に会報部分が「ふぇらむ」として独立し、「鉄と鋼」は論文誌となったが、その後2誌は独立のまま合本され現在に至っていることはご承知のとおりである。入会してしばらくは筆者にとって「鉄と鋼」は重要な情報源であり、その後は情報源であるとともに、情報の発信先でもあった。ここ数年は現役を退いたこともあり、毎月送られてくる「鉄と鋼」は、目次を見て面白そうな論文に目を通すぐらいで、丁寧に読み込むことは少なくなってきた。

入会当初は圧延潤滑に関する研究を行っていた。当時は圧延に関する研究は鉄鋼メーカーの独壇場であり、「鉄と鋼」に圧延関連の記事が掲載されることが多く、論文ばかりでなく解説記事など多くの文献が研究を進める上で大変役に立った。「ふぇらむ」の発刊前であり、「鉄と鋼」が会報を兼ねていたので特集号も頻繁に企画され、解説や展望等の総説的な記事が掲載されることも多いのが有難かった。数多くの文献を参考にさせていただいたが、中でも熱心によく読んだと思うのは70巻（1984年）15号の「再結晶・粒成長」特集号である。B5判ではあったが論文32編、解説10編、総ページ数386ページと言う今では考えられないような大部の一冊であった。この号に掲載されていた論文や解説の大部分は、当時鉄鋼材料の高速熱間圧延時の組織変化について研究を進めていた筆者にとって、大変参考になるものであった。4年前に定年を迎えた際、本棚を埋めていた「鉄と鋼」やTrans. ISIJ、ISIJ Internationalなどの多くの学会誌を、自分自身の論文が掲載されている号も含めて処分したが、この号は学会誌のバックナンバーを置いた棚ではなく一般の書籍と同じ所に置いてあったこともあって、背綴じが外れて2冊になった状態で、しかし各所に付箋が付いたり栞をはさまれたまま、まだ本棚に並んでいる。

そのような中で、「鉄と鋼」にオーステナイト系ステンレス鋼の熱間圧延時の組織変化に関する論文を投稿し、俵論文賞を頂いたのも懐かしい思い出である。もちろん当時は手書きの原稿で、書き直さなくてもいいように考え考え慎重に、25字×18行の「鉄と鋼」専用原稿用紙の枡目を埋めて行ったものである。悪筆であったので、査読をされた方はさぞ迷惑をされたのではないかと、いまだに内心忸怩たる思いである。

情報源として、また情報発信先としての「鉄と鋼」であったがその後、査読者として関わることになり、さらには編集委員として専門委員、分野担当幹事、編集委員会副委員長を務めさせていただくことになった。自分自身にとっての重要な情報源、情報発信先であった「鉄と鋼」を、すべての会員にとっての情報源、情報発信先として満足されるような存在であるように気を配る立場になったわけである。

査読と言うのは、多くの方もそうだと思うが「鉄と鋼」に限らず気を使う作業である。独創性、手法の妥当性、論理の確かさ、実験結果の信用性、表現の妥当性、内容が論文誌に適合しているか、工業への有用性などを判断して掲載の可否を判断するわけであるが、中でも独創性の判断に最も気を使った。査読を依頼される論文の内容が自分自身が普段興味を持って研究している分野あるいはそれに近い場合は、投稿論文の概要や諸言を読めば投稿論文のその分野での大体の位置づけが判断でき、内容の独創性についても比較的容易に判定できる。しかし、投稿論文が扱っている内容や分野について必ずしも精通しているわけではないことも多々ある。そのような場合に、投稿された論文の内容にどの程度の独創性があるかということを判断するのは結構難しいものであると感じた。投稿論文の当該分野での位置づけを判断するため、投稿原稿に引用された参考文献で入手可能なものはすべ

43

てコピーして手元に置くことから作業を始めていた。もちろんすべてを精読するわけではないが、概要や主要な図などに目を通すだけでも判断を下すうえで大いに役に立った。文献を入手するためには図書室へ通わねばならず、参考文献をそろえるだけでもかなりの時間と手間がかかった。最近ではインターネット上でデータベースにアクセスすれば、ほとんどの文献が簡単に手に入るので、文献収集に余計な時間を費やすことはなくなり大変楽になった。これに関して編集委員会で、査読を通常の業務で多忙な会員ばかりでなく、時間に余裕があると思われる現役をリタイアした会員にも積極的にお願いしてはどうかという提案がなされたことがあり、その際にリタイアするとデータベースなど参考文献へのアクセスが難しくなるので査読依頼は難しいのではないかという意見が出て沙汰止みになったような記憶がある。

1998年4月から2年間加工分野の担当幹事を務めさせていただいた。1995年4月に、それまでそれぞれの編集分科会において別個に行われていた和文誌と欧文誌の編集業務を、単独の論文誌編集委員会のもとで一体化して行うことになっていたので、「鉄と鋼」および欧文誌の双方の編集に携わることとなった。分野担当幹事の主な仕事は、投稿された担当分野の論文の内容を見て、どなたに査読をお願いするかを決めること、頂いた査読結果に基づいて掲載可否の判断をしておおむね2カ月に1回開かれる編集委員会に諮ることである。査読者は専門委員に依頼することが多いが、内容や査読者の負担を考えて委員外の会員に依頼することもよくあった。頂いた査読の内容によっては、別の方の意見を伺った方が良いと思える場合もあり、二人目の方にあらためて査読をお願いしたり、期限が過ぎても査読結果が返ってこない場合は、事務局から催促をしてもらうなどの作業がある。また、査読を依頼しても多忙、専門外などのさまざまな理由で引き受けていただけないこともあり、新たな査読者を探すことに時間を費やすこともあった。大部分の査読者は、原稿を丁寧に読んで適切な査読報告を作成して下さったが、まれに査読者の主観（主張）があまりにも強すぎるもの、査読の域を超えて論文の作成指導になっているもの、あるいは逆に査読者がきちんと読んでいないのではないかと思われるものなどがあり、対応に苦慮することもあった。様々な査読報告に接する機会があったことは、その後自分自身が論文を執筆したり査読をしたりするうえで勉強にもなり、また自らへの戒めにもなった。

2005年4月から4年間論文誌編集委員会の副委員長を務めさせていただいた。副委員長は2名で、当時はそれぞれ和文誌と欧文誌を分担して担当しており、和文誌を担当することとなった。筆者と「鉄と鋼」との関係が最も密接だった4年間である。情報発信の場としての和文誌の役割が欧文誌に比べて低くなりつつある中での和文誌担当ではあったが、海外への情報発信の重要性が増す一方であったこと、和文論文に対する学界での評価が英文の論文に比べて高くないことなどが根底の問題としてあり、和文誌の地位向上あるいは投稿論文数の増加などは編集の努力だけで解決できる問題ではないことを痛感した。

任期中の作業としては、J-Stageによる投稿と査読の電子化の検討、「ふぇらむ」との合本化が記憶に残っている。投稿および査読の電子化は欧文誌が先行することになっていたが、和文誌も電子化することには変わりはなかったので、電子化の準備段階から作業に参加した。投稿と査読は論文誌の存立の要であるから、あらゆる事態を想定して対応を考えねばならない。今では詳細な記憶はないが、投稿・査読システムの立ち上げに伴う作業を目の当たりにできたことはありがたい経験であった。海外も含めていくつかの学会誌で、査読者として電子査読システムを利用する機会があるが、それぞれ個性があって、システム立ち上げまでの舞台裏を想像すると、語弊があるかもしれないが興味深いものがある。

「ふぇらむ」との合本化が企図されたのは、「鉄と鋼」を論文誌として独立させた結果、それまで会報を兼ねて国内の全会員に配布されていた論文誌が有償で希望者のみとなったため、会員が論文に触れる機会が少なくなったこと、また、そのことが和文誌の地位低下、投稿論文数の減少につながり、「鉄と鋼」の月刊発行も困難になりつつあったというのが主な理由であったと記憶している。会員アンケートの結果を参考にし、WGで何回かの会議を重ねて合本に至ったわけであるが、表紙デザインを決める過程で、筆者が内心でこれは良いかと思った表紙案がほとんど他の委員の支持を集めなかったことがあり、自らの美的感覚のなさを改めて認識させられことであった。

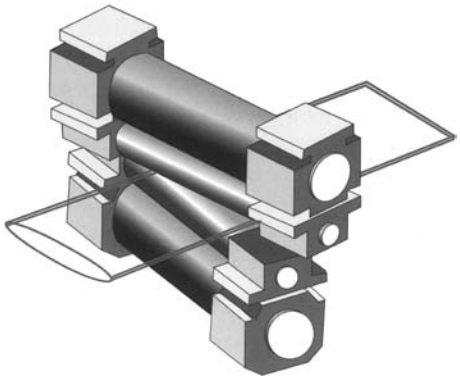
ところで、欧文誌に比べて和文論文誌の研究成果発表の場としての役割が低くなりつつあることは残念ではあるが、ほとんどの自然科学系学会に共通した悩みである。筆者が編集に携わっていた時も、たびたび和文誌の地位向上、投稿論文数の増加に向けての対策が議論されていたが、未だにこれと言った妙案がないのが現状であると思われる。情報の流通速度が速くなった現状では、オリジナリティーを世界に主張しようと思えば、日本語での情報発信のみでは限界があるのはやむを得ないことであろう。幸いなことに「鉄と鋼」に掲載されている論文は、欧文誌からの転載論文も含め質の高いものが多いので、学会誌としてのレベルが低下しているわけではないと思う。編集委員会が丁寧な査読をはじめとする様々な努力をされて、論文の質を高く保ち論文誌としての価値を下げないよう尽力されていることが伺える。鉄鋼に関連する分野の、日本の優れた技術や学術的成果を世界に発信するた

44

めには、情報発信の場が「鉄と鋼」からISIJ Internationalに移りつつあるのはやむを得ないとしても、それらの優れた技術や学問の水準を維持するためには、最先端の技術や学術的成果に関する国内での情報交換が、広範囲の技術者や研究者の間でスムーズに行われることが必要である。そのために和文誌が情報交換の場として果たすべき役割はまだまだ重要であると思う。第100巻以降も、「鉄と鋼」が日本の鉄鋼関連の技術者および研究者にとってなくてはならない存在であり続けるであろうし、またそうあってほしいと心から願っている。

以上、「鉄と鋼」にまつわる思い出を気ままに書かせていただいた。特に、編集に携わるという貴重な体験をすることができたので、そのことに多く触れた。手元に十分な資料がなく、あやふやな記憶のままに書いたので、あるいは思い違いがあるかもしれないがご容赦いただきたい。最後に、「鉄と鋼」100周年という記念すべき大きな節目に寄稿の機会を与えてくださった関係者の皆様に感謝の意を表します。

(2013年9月10日受付)



「鉄と鋼」の 今昔

■過去50年の歴代編集委員長

昭和38年4月～40年4月	佐藤忠雄（日本特殊鋼（株））
昭和40年4月～44年4月	荒木　透（東京大学兼金属材料技術研究所）
昭和44年4月～47年4月	松下幸雄（東京大学）
昭和47年4月～49年4月	堀川一男（日本鋼管（株））
昭和49年4月～51年4月	松下幸雄（東京大学）
昭和51年4月～54年4月	長島晋一（横浜国立大学）
昭和54年4月～56年4月	田中良平（東京工業大学）
昭和56年4月～58年4月	加藤健三（大阪大学）
昭和58年4月～60年4月	宮川大海（東京都立大学）
昭和60年4月～62年3月	坂尾　弘（名古屋大学）
昭和62年4月～平成元年3月	鈴木朝夫（東京工業大学）
平成元年4月～3年3月	南雲道彦（早稲田大学）
平成3年4月～5年3月	佐野信雄（東京大学）
平成5年4月～7年3月	小指軍夫（NKK）
平成7年4月～9年3月	馬越佑吉（大阪大学）
平成9年4月～10年3月	浅井滋生（名古屋大学）
平成10年4月～12年3月	水渡英昭（東北大学）
平成12年4月～13年3月	前田正史（東京大学）
平成13年4月～15年3月	加藤雅治（東京工業大学）
平成15年4月～17年3月	溝口庄三（東北大学）
平成17年4月～19年3月	月橋文孝（東京大学）
平成19年4月～21年3月	榎本正人（茨城大学）
平成21年4月～23年3月	津﨑兼彰（物質・材料研究機構）
平成23年4月～現在	江阪久雄（防衛大学校）

〈所属は当時のもの〉